

博士論文要約

都賀庭鐘における漢籍受容の研究 —初期読本の成立—

劉 菲菲

序章

本論文の目的、問題意識と解決方法、本論文の構成、都賀庭鐘とその著述について述べた。

【第一部】 庭鐘読本の典拠研究

第一章 『英草紙』第六篇「三人の妓女趣を異にして各名を成す話」典拠考

『英草紙』第六篇の典拠として、従来「『青瑣高議』の「王幼玉記」、『喻世明言』の「衆名姫春風弔柳七」の一節」等が示されてきた。ところが、これらよりも『緑窗女史』が典拠としてより適切である。本章では、まず、第六篇第一話の原拠である「王幼玉記」を翻案した箇所について、『青瑣高議』や明代の諸類書『緑窗女史』『剪灯叢話』『青泥蓮花記』『艶異編』『情史類略』に載る王幼玉の話と本文を比較対照し、庭鐘が直接依拠したテキストは『緑窗女史』である蓋然性が高いことを検証した。さらに、これまで出典不明とされてきた第二・三話の原拠についても、同じく『緑窗女史』の卷十二「青楼」所収の「馬湘蘭伝」にあることを指摘した。翻案の際に、庭鐘は原拠とした馬湘蘭の特徴のうち、明るい性格と遊女生活を楽しんで生きるという側面を二女の檜垣に、俠気を持つ側面を三女の鄙路にそれぞれ特化させて、二人の人物に分けて造型している。また、馬湘蘭が王穉登の前で泣き崩れる場面と臨終の場面を檜垣の話に、少年の求婚を拒む趣向と盗賊が馬湘蘭の家に侵入する趣向を鄙路の話に、それぞれ織り込んでいる。最後に、「三人の妓女」の冒頭文の後半部分に見られる妓女と良家に関する論説は、『照世盃』巻一「七松園飯を弄して真と成す」に発想を得て作られた可能性を指摘した。両作は、妓女の気性に対する認識や妓女と良家を比べて、妓女の方に真情を認める点で共通している。

第二章 『莠句冊』第五篇「絶間池の演義強頸の勇衣子の智ありし話」典拠考

『莠句冊』は、中国の説話を日本の伝説の世界に翻案することを基本的な方法とするが、その典拠については、未だ十分に明らかではない。第五篇について、先行研究では、冒頭部の地誌的記述が『五畿内志』所収の「河内志」と「撰津志」に、第一話の茨田守怪異譚が皿屋敷伝説に、強頸・衣子築堤譚が『日本書紀』の仁徳天皇十一年条に記された茨田堤説話に、それぞれ拠ると指摘するが、第二話の木菟宮怪異譚と第三話の大隅宮怪異譚の出典は、従来未詳であった。本章では、まず、茨田堤説話について、『日本書紀』と「河内志」を比較対照し、庭鐘が直接依拠したテキストは、「河内志」であることを特定した。次に、第二話の典拠は明代の白話小説『禅真逸史』にあることを指摘した。即ち、第二話は同書第二十一回の杜伏威と薛挙が、民家の寡婦を妖術で誘い出して姦淫しようとする男を撃ち殺す話を粉本とし、鬼が出没する孤忠廟を、怪物が現れる木菟宮に置き換えつつ、具体的な景色や場面描写も同書に基づいている。さらに、第三話は『禅真逸史』の後集である『禅真後史』から趣向を取っていたことを指摘した。即ち、第三話は同書第三十三回から第三十五回までの党家の怪異譚を粉本とし、党家の娘達が妖怪に遭遇する場面や下男

の翼児が妖怪と闘う場面を主な趣向として利用し、また娘達が針仕事を怠けた疑いで母の荀氏に叱られるといった細部の趣向も鑿められている。

第三章 『通俗医王耆婆伝』 典拠考

本章では、まず、第一・五回の典拠は『金瓶梅』にあることを指摘した。即ち、『金瓶梅』第七十一回の百官朝儀の場面と第五十五回の西門慶が蔡太師へ誕生日の贈物を進上する場面を、第一回に取り込んでいる。また、『金瓶梅』第五十五回、六十回、六十一回に描かれている、出産後、体調不良の李瓶児を医者達が診察する四つの場面を、第五回に特化させている。次に、第六・七回の翻案において、庭鐘は『禅真逸史』『禅真後史』から素材を取ったことを指摘した。即ち、『禅真後史』第五十五回の瞿琰が鄭氏の奇病を治し、妖怪を調伏する話を第六回に、『禅真後史』第五十六回の瞿琰が恙虫に憑かれた顧信二を救う話と、『禅真逸史』第十三回の林澹然が狐に魅入られた張我を救う話を第七回に、それぞれ取り入れている。また、『耆婆伝』を執筆する際に、庭鐘は複数の書物を机上に置いて参照したと見られ、上記のほかにも、『水滸伝』や、『郭統』『潜確居類書』『広東新語』などの類書や随筆をも利用しており、それらの書目は庭鐘の読書筆記『過目抄』に見えていることを指摘した。

第四章 『義経磐石伝』 典拠考

本章では、まず、『義経磐石伝』第六回の前半部の、平徳子の中宮立后のお祝いのため壹岐国の使者の内田二郎が平清盛に謁見する話は『金瓶梅』第五十五回に、第十五回の後半部の、義経が鑑石の中に入って危機を脱する話は『拍案驚奇』卷三十一に、それぞれ趣向を撰取したことを指摘した。また、庭鐘が『金瓶梅』第五十五回を利用した理由について、庭鐘は蔡京と清盛の生い立ちに存在する共通点を意識し、二人を重ね合わせて描こうとしたため、『金瓶梅』第五十五回の趣向を利用したと推測した。さらに、『義経磐石伝』を執筆するにあたり、庭鐘は意識的に中国の文学作品や歴史譚に源平合戦中の出来事と類似する話を求めたこと、そして両者を類比し、関連づけて作品に生かそうとしたことを指摘した。

【第二部】 庭鐘読本の新解釈

第五章 『垣根草』 新論

本章では、『垣根草』作者の問題を再検討した。まずは『垣根草』の作者について言及した先行研究を、庭鐘作説を支持するものと庭鐘作説を否定するものに分けて掲げ、諸説の主張や根拠を確認した。次に、これまで指摘されていない『垣根草』と『英草紙』『繁野話』の類似表現十五例を新たに示した。さらに、庭鐘真作間に見える類似表現五例を示した。これによって、庭鐘は馴染んだ表現を自分の複数の作品に用いる癖を持つことがわかる。『英草紙』『繁野話』の刊行は『垣根草』に先んずるため、別の作者がそれらから表現を取った可能性がある。一方で、庭鐘自身が表現を再利用した可能性もある。また、『垣根草』と庭鐘真作に見られる共通の白話語彙十九例を示した。これらの白話語彙に施された左訓は独特であるが、庭鐘真作のそれと一致する。なお、白話用語以外の語彙も多く重なることを指摘した。以上により、単に表現の類似だけで、『垣根草』の作者が庭鐘ではないと判断するのは、根拠が不十分であると指摘した。そして、従来典拠不明とされてきた第三・五・十話がそれぞれ『宣室志』「陳袁生」、『三国志演義』第三十八回、『五朝小説』「針異人伝」に拠ることを指摘した。さらに、既に先行研究により判明した『今

古奇観』『剪灯新話』などを含め、『垣根草』の典拠つまり創作の際に参照した漢籍は、何れも庭鐘の読書範囲にあることを検証した。また、庭鐘の翻案手法の特徴について言及した先行研究に基づき、庭鐘ならではの翻案手法を六点にまとめた。この六点が、『垣根草』ではどのようなものであるか、具体的な例を示して検証する。最後に、『垣根草』と庭鐘真作から共通の価値観を抽出して論述を進めた。『垣根草』第十話における医者のあるり方に関する言説と『耆婆伝』第三回の医学観に、『垣根草』第三話における寺社造営に財力と民力を費やすことを批判する言説と『英草紙』第九篇の寺社造営を非難する内容に、それぞれ共通性が確認できた。以上の諸方面からの検証により、『垣根草』は庭鐘真作である可能性が高いと結論づけた。

第六章 『繁野話』第八篇「江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈む話」新論

本章では、まず、小太郎と李甲の登場する場面の描写を比較し、庭鐘は小太郎を原拠の李甲よりも否定的に描き、複雑で多様な側面を持つ人物として造型しようとしたことを指摘した。さらに、白妙と杜十娘の登場する場面の描写を比べ、庭鐘は原拠以上に同情や理解を込めて遊女の白妙の運命を描いたことを検証した。また、従良に執着する遊女の不幸な運命を主題とした原拠と異なり、庭鐘は遊女の内面の気性に眼目を置いていることを指摘した。最後に、第八篇の冒頭文は、『初刻拍案驚奇』第二十五回「趙司戸千里遺音、蘇小娟一詩正果」の冒頭文に影響を受けて書かれた可能性を検討した。

【第三部】 庭鐘の読書と読本習作

第七章 庭鐘の読書筆記『過目抄』とその読本習作

本章では、まず、抄出された出典書物を再検討し、庭鐘の読書範囲をより具体的に明らかにした。その上で、庭鐘の読書と古義堂との関係について検討を加えた。また、『過目抄』と庭鐘の作品を照合し、作品の語彙や表現、細かな素材が、どのように『過目抄』と直接関わるのかを検証した。例えば、『繁野話』第五篇における狒狒退治の場面は、『過目抄』第九冊の『広東新語』よりの抄出に、『莠句冊』第四篇の主人公・回頭和尚については、『過目抄』第六冊の『鴻苞集』の抄出に確認できた。『耆婆伝』第一回に羅列されている珍奇異宝は、『過目抄』の抄録対象書目である『説郛』『潜確居類書』などに取材していると指摘した。

第八章 庭鐘読本の白話語彙考—『通俗医王耆婆伝』を中心に—

本章では、まず、『耆婆伝』に使われる白話語彙や表現及び白話文法を摘出・整理して、その全容を具体的に明らかにした。また、庭鐘の白話語彙の使用実態を分析し、その誤用をも指摘した。また、庭鐘は、『耆婆経』の文語を白話語彙に置き換える方法と『耆婆経』の行文に白話語彙を付け加える方法の二つの手段を取って、白話語彙を作中に取り込んだことを、具体的な例を示して論証した。最後に、それらの白話語彙は、既に判明している庭鐘の読んでいた白話小説『水滸伝』『禅真逸史』『禅真後史』などに見られることを検証した。

終章

各章のまとめと今後の課題を述べた。